村山創生懇談会における発言要旨
【テーマ】地域における課題と今後の施策展開の方向性

日　　時：令和６年１月 15 日（月）
14:30～16:00
場　　所：村山総合支庁本庁舎　講堂

【１巡目】　自己紹介・近況報告

【大山 真吾 氏】（大山精機 専務）

・尾花沢市で省力化装置部品加工を行っている。
・製造業の分野でも DX が多く取り入れられるようになってきた。弊社の場合、従業員のノウハウをデータベース化することで、新しい人材が入ってきた際もすぐに仕事ができるように取り組んでいる。

【佐藤 恒平 氏】（地域振興サポート会社　まよひが企画　代表）

・地域振興をお手伝いする仕事を行っており、主な業務は朝日町のゆるキャラ「桃色ウサヒ」の運営である。昨年はウサギ年だったこともありメディアに多く取り上げてもらった。
・２年前から自社のオフィスを、朝日町立朝日中学校の空き教室内に「スキマクラス 2.5 組」として設けている。現役中学校を民間会社がオフィスに利用するのは全国初の取組みであり、背景にはコミュニティスクールと呼ばれる学校の運営を地域住民と共同で行っていくという取組みがある。放課後は生徒たちに開放しており自由に交流ができる。先生からの相談も多く、先生の依頼に応じ授業の請負をしている。昨年は修学旅行にも同行し、地元の特産品を生徒とともに PR してきた。また、朝日町で令和 10 年度に設立予定の義務教育学校の準備室にも入れてもらっている。
・自分が目指しているのは「教育課程に開かれた地域社会」である。現在、学校教育がもっと地域に入っていこうと取り組んでいるところが多いが、学校の先生たちも忙しく地域に入ることが難しい。そこで地域側がどうやって学校に入っていくかを模索することで新しい地域振興が生まれるのではないかと考えている。

【佐藤 千草 氏】（㈱吉田屋旅館　代表取締役）

・蔵王で２つの旅館を経営しており、昨年から蔵王温泉観光協会の副会長も務めている。
・コロナ禍を越え、特に今の季節は思いのほかインバウンドの復活がすごい状況である。コロナ禍前は週末・土日は日本人が多かったが、今は連日外国人の方が多く、ずっと忙しいのが続いている。ただ、冬季以外も同じように集客を続けられるようになっていかないといけない。蔵王は四季を通じて自然がすばらしいのでそれも知っていただく必要がある。
・一方で人手不足も激しく、求人を出しても日本人が集まらない。そのため、特に旅館関係は外国人に頼らざるを得ない状況。お客さんも働く人も外国人が多いという時代になってきた。
・星野リゾートが蔵王センタープラザの跡地を買って、新しいホテルを建てるという話が出

ているが、自分と同世代の社長たちは概ね好意的に受け取っているように感じる。ただ、自分たちの従業員を星野に持っていかれるのではないかという懸念もある。

【澁谷　美保 氏】（山形県立山形西高等学校　１年生）

・中山町に住んでおり、通っている高校もバラバラの６名で「あいらぶ・なかやま SEASON2」という活動をしている。
・この活動をするに至った経緯は、小・中学校の総合の時間に町のことを学ぶ学習があり、その延長として、今度は自分たちが動いてできることは何だろうかと考え、中山町立中山中学校の卒業生の有志で集まったというものである。
・現在の活動としては、１～２か月に１回集まり各校で話題になっていること等を共有し、自分たちの町にはその流行の話題の中で何が足りないのかを話し合っている。また、季節ごとに羽前長崎駅の待合室の飾り付けを行っている。高校生なのであまり大きく動くことはできないが、家にある物を持ち寄ったりして、自分たちができることをやっている。
・今後は、自分たちで SNS を開設したり、同じ思いを持って後に続いてくれる人たちを増やすためにも、小・中学校とも関わりを持った活動をしていきたい。

【田中 麻衣子 氏】（㈱キャリアクリエイト　ヤマガタ未来ラボ編集長）

・山辺町出身で、現在は東京に在住し、山形と人とをつなぐ仕事をしている。学生の就職支援、社会人の転職支援、自治体の移住促進・関係人口創出のサポート、大学・高校でのキャリア授業などを行っている。いま目の前の移住・転職に対するものや、いま動くわけではないがゆくゆく可能性のある若者に対するものなど、それぞれの段階に応じたやり方で支援している。
・人の採用にあたり選ばれる会社になるためのサポートも行っている。各社必ず強みがあるので、その強みを聴き取って引き出すようにしている。例えば、いきなり面接ではなく、お互いざっくばらんに話をするカジュアル面談を行うことで、最近採用が成功している会社の例がある。そのような工夫を伴走しながら行っている。
・学生からの相談も受け付けており、県外の大学にいる山形出身の方が、大学のキャリアセンターに行っても山形の情報が少ないということで相談に来ることが多い。本人が希望しているかよりも相性が合いそうな会社につなぐことで予期せぬ出会いを作るようにしている。
・本年度は、村山総合支庁の依頼で、県外にいるけれど山形に関わりたい人と地域とをつなぐモデル事業にも関わっている。

【堀川 裕志 氏】（羽陽建設㈱　代表取締役）

・上山市で土木と建築を両方やる総合建設業を営んでいる。
・一昨年、会社の地域貢献事業として、山形明正高校の人工芝を譲り受けて廃校のグラウンドに敷き、市内のサッカースクールのための人工芝のグラウンドを整備した。陸上日本代表選手の走り方教室、青年会議所主催のスポーツ塾、地域の方との交流会の開催などに使用してもらっている。昨年は羽陽建設の中にサッカー部を作り、サッカースクールや上山市役所のサッカーチームと試合もした。

【村山 恵子 氏】（特定非営利活動法人クリエイトひがしね　理事・事務局長）

・東根市のさくらんぼタントクルセンターとあそびあランドで子育て支援の活動をしている。
・タントクルセンターが来年で 20 周年を迎える。当時遊びに来ていた子供たちが大人になって子供を連れて遊びに来てくれるといううれしい環境にあり、親子の笑顔に囲まれて幸せを感じている。
・その一方で、20 年経過すると親子を取り巻く課題も変わってきている。昨年、あそびあランドを会場に東北初の「オレンジリボンフェスタ」（児童虐待防止の啓発イベント）を開催した。児童虐待は親であれば誰でもリスクがあるものである。子育てで孤独感や不安などがあれば気軽に相談できるような居場所でありたいと考えている。また、これからもっと家庭教育と若者支援に力を入れていかなければならないと考えている。

【山蔭 瞬 氏】（山形市基幹型地域包括支援センター　第一層生活支援コーディネーター）

・山形市からの委託を受け、（福）山形市社会福祉協議会において生活支援コーディネーターとして活動している。
・以前研修で来県した講師の方から「山形県は地域福祉の聖地である」との話をいただいたことがある。昭和 30 年代に、それまでは福祉は行政でやるものというイメージがあったのに対し、住民主体でやっていくものであるという原則が、全国から研究者が山形に集まりまとめられたという経緯がある。
・生活支援コーディネーターの仕事は住民主体による地域福祉の活性化である。そのために行っているのが、①地域の方のニーズを把握することと、②今ある取組みを活用するためにどんな取組みがあるかを調べることである。その調べたものを「生活お役立ちガイドブック」という形でまとめることで、それまでは知る人ぞ知るが、なかなか情報にアクセスできないでいた高齢者を情報につなげられるようにした。
・主な業務として、タクシー会社やバス会社の協力を得ながら、地域の人が移動支援を活用しやすいように工夫する取組みを行っている。また、高齢者のデジタルディバイド解消のためのスマホ教室の開催などにも取り組んでいる。最初は文字を打つのもおっくうだということで全然触ってくれなかったが、取組みを続けていくことで平均年齢 80 歳の方々がスタンプを使いながらラインをやりとりできるようになり、とてもうれしく感動した。

【２巡目】　地域における課題と今後の施策展開の方向性について

【大山 真吾 氏】

・自社の２階に山形大学地域価値創成学研究所の尾花沢サテライトを設けさせてもらっている。メンバーは 13 人で、農家の方、銀山温泉観光協会の方、道の駅のスタッフの方などすべて異業種の方である。このサテライトができたきっかけは、地域活性化についてみんなで話をした際に方向性がバラバラでまとまらず、共通認識となるものが必要だと感じたことである。そこで、尾花沢サテライトを会場にセミナーを開催し、①新しいものを作るには何のために作るのかという目的を展開していくという考え方（イノベーション創出思考

法)、②品質はだれが決めるのか、③どのように発信するか、④どのようにしたら売れるのか（マーケティング）という４点について学んだことで、それらの共通認識を持ったうえで話をすることができるようになった。また、このサテライトができたことで、雪を活用した徳良湖スノーランドや銀山温泉での新たなイベントの開発など地域において様々な活動が発展し始めた。

・自分も、東根市のような大きな遊戯施設を作ることは難しくとも、豊かな自然を生かした尾花沢らしい子育てができないかと考え、昨年「森のようちえん」を立ち上げた。そのきっかけとなったのは、自社の従業員が作ったものを自分が褒めるのと、発注者の方が褒めるのとでは、「自己効力感」（自分はやれるという自信を持つこと）の成長度合が違うことに気づいたことである。その自己効力感が成長すると今度は会社の中がきれいに整理整頓され始めた。これは自己効力感が成長すると愛着が増すのではないかと考えた。そこで森のようちえんに遊びに来た子どもたちを褒めちぎるようにした。そうしたところ「普段学校ではこんなことができるような子ではなかった」と先生たちが驚くほどの成長度合が見られた。それは常日頃一緒にいる親や先生が褒めるよりも、自分たちのような見ず知らずの人が子どもたちのことを承認することによって、より自己効力感が増すということである。それにより地域への愛着が生まれ、将来的に人口減少に歯止めをかけることにつながるのではないかと考えている。

（以下、会議後の補足意見）

・以上のことから、外部の人から承認されるようなイベントを増やすことで、主催者側のモチベーションも上がり、地域に対する愛着も急上昇すると考える。

【佐藤 恒平 氏】

・大山さんがおっしゃっていたように、第三者が言うことによって自己効力感が上がるというのは自分も中学校の中で活動していて実感している。自分も放課後に子どもたちと一緒に話をしている際に、先生や親への尊敬の念を持とうということをさりげなく伝えるようにしている。先生や親が自分ではなかなか言いづらいことを第三者の自分が代わりに言うことで、子どもたちの見方等を変えられるのではないかと考えている。

・学校のこれからを考えた際、学校に来られない子についても支援していきたいと考えている。自分が運営するゲストハウスを県内の不登校の方が自由に集まることのできる居場所として月２回開放している。また、ゲストハウスに来ることによって保健室登校と同じように学校に通ったと認定してもらえるという適応指導教室を週１回行っている。直接教室に行けなくとも中学校内のオフィスに遊びに来ないかと橋渡しをするような取組みも行っている。

・最近の仕事として、福島県と群馬県からの依頼でドキュメンタリー映画の製作をしている。これは地域でがんばっている人たちの姿を地域の中の人たちに見てもらうためのものである。地域の人たちが何に悩み、課題感を持っているのかという過程の部分はなかなか人目に触れない。その部分を 30 分程度の短い映画にして見てもらうことで、地域の人たちの理解や変容を得られないかと考えている。福島県で行った上映会では 500 人の集落中 150 人が参加し、見終わった後にこの地域をどうしていきたいかなどについて話し合った。言葉やデータだけよりも物語にして伝えることで人の心は変容すると考える。

・廃校を利活用したにぎわい作りというものもあるが、自分の中学校内のオフィスは、廃校になる前に地域の子どもたちにどうアプローチするかという教育の観点に重きを置いた取組みである。

【佐藤 千草 氏】

・今後の蔵王の課題の１番は気候の変動である。夏が暑すぎて蔵王は夏涼しいとは言えなくなってきた。冬も少雪でスキーなどのウィンタースポーツができなくなる時代が来るのではないかと思っている。
・また、人口減少により蔵王の小・中学校の生徒数が先生の数よりも少ない状況である。岩手県の安比高原では昨年度インターナショナルスクールが開校した。そこは日本で最も学費が高い学校らしいのだが、地元の子は３人程なのに対し、世界各国から１年目は 148 人、２年目は 170 人程の入学生がいるとのことであった。最近の蔵王は働き手も旅行者も外国人が多く来ており、様々な価値観や宗教を理解していかなければならない時代になってきているので、蔵王もインターナショナルスクールができるような場になってくれたらよいと考えている。その際は地元の子は学費が安くなるなどの特例があるとなおよいと考える。
・インバウンドのお客様からは銀山温泉と宮城蔵王キツネ村に行きたいという要望が多い。ただ、蔵王から銀山温泉にレンタカーを借りずに公共交通機関で行くのはほぼ不可能に近い。この２大観光地がもう少し交通でつながったらよいと考える。キツネ村も冬場は行くのはまず不可能で、同じ蔵王なのになぜこんなに不便なのかと海外の方から不思議に思われる。もっと周辺も取り込んだ形で楽しく滞在できる場に蔵王がなれたらよいと考える。

【澁谷　美保 氏】

・先ほど佐藤恒平さんの話にもあったが、不登校になると家から出ず人との関わりもなくなってしまうので、学校には行かずとも人と関わることで学べる場があるのはとてもよいと感じた。
・友達と遊びに行こうとなった時に、例えば中山町からイオンモール天童に行こうとすると、左沢線で山形駅に行き奥羽本線に乗り換えるという手間がかかるため気軽に行こうという気持ちがなかなか起こらない。そのため結局山形駅前で遊ぶことが多い。
・山形市に買い物の場所や文化施設を集めてしまうと他の地域に行くきっかけがないと感じている。自分は刀剣乱舞という日本刀をモチーフにしたゲームが好きなのだが、例えば博物館を山形市以外の地域に分散させ、その企画展を博物館でやったらその情報を受け取った人たちが一斉にその地域に来ると考える。そのように色々な地域に出向くにはそこに行きたいと思えるような何かのきっかけが必要だと感じる。

【田中 麻衣子 氏】

・先ほど山蔭さんから紹介してもらったガイドブックがすばらしく感動した。親が一人暮らしで心配なのでこういうものがあるとよいと思った。
・山形に帰りたいと思っていても家庭を持ったりするとなかなか帰るのが難しくなる。人が本気で地元に帰ろうと考えるのは親が倒れるなどの転機があった時であるが、前々から山形に関する情報が入っていないと、いざ時が来た時にはもう遅く動きにくくなっている。

そこまで移住の必要性を感じていない人にどう情報を届けるかは難しい問題であるが、自分のことで言えば、「山形にもこんなにおもしろく仕事をしている人たちがいる、山形でもこんなことができる、ということをなぜもっと早く教えてくれなかったのか。それを知っていたら山形から出なかったかもしれないのに。」という思いがある。

・人が移住するには、移住イベントは最後の一押しであって、そこに至るまでには何回も会って話をしたり情報提供をしたりして、時間をかけて気持ちを育てていくことが必要である。マーケティングの観点からそもそも移住の気持ちすらない人の気持ちを育てていくことがコーディネーターの仕事だと考える。

・関係人口から移住につなげるにはそのように時間がかかるものであるが、行政の仕事だと単年度でどれくらい数値目標を達成したかという実績を求められるため相性が良くないと感じている。関係人口という概念は幅広く、例えばおてつたびやタイミーのような大手サービスとコラボしてたくさん人を呼んだとしても、その中に山形出身者などのゆくゆく移住してくれる可能性のある人がどれくらいいるのか、どのように時間をかけてそれらの人の気持ちを育てていくのか、という「質」を見ていくことが必要である。コーディネーターは行政の方だけでなく地域の方や民間の方など様々な人がおり、それらの人の力を借りながら時間をかけてコーディネートしていく仕組みづくりが必要であると考える。

（以下、会議後の補足意見）

・例えば、学生向け就活支援事業において、数集めをがんばっているが、実態は「交通費補助が出るから旅行代わりに来た」という人も多かったとの話をよく聞く。目標数値は必要ではあるが、それを追うのに一生懸命になってしまうと、「質＜数」になってしまい、「関係人口から移住につなげる」という最終目標にしっかりとつながっていくのかと疑問に思う。どれだけ関係人口が増えたかという数の目標と共に、「質の向上」につながる、数年かけてコーディネートしていく仕組みの両輪が必要と考える。

・移住者獲得に向けて、郷土愛教育等を県内在住時にやっているが、「県外に出た山形出身者」にも引き続き施策を展開することが必要である。その部分がぽっかり空いている印象を受ける。例えば、都会での物産展の販売を手伝う、県外にいてもオンラインで山形のプロジェクトを手伝うなど、「県外に出た山形出身者」に水やりをすることで、移住するかもしれない人を育てることをした方がよい。

・関係人口創出・移住促進には人と人とのマッチングが重要だが、時間をかけて移住を視野に入れた流れを作っていくには、行政職員や専属の委託職員だけでは、多様な価値観に対応しきれないため限界を感じる。「相性の良い人」に出会えるのが大事であり、各地域で人と人とをつないでいる民間のコーディネーター役の人がいて、人がつながっているのを実感する。ただ、元地域おこし協力隊の方などがんばってはいるものの「若い人は重宝されるが食っていけない」という話もよく聞く。「ボランティア」や「おせっかい」ではなく、「コーディネーター」という仕事に価値を置いて支援してほしい。

【堀川 裕志 氏】

・現在、かみのやま温泉駅の東のエリアにパークタウンを整備する構想がある。この場所には、地域貢献に役立てることを条件に当社で購入した元蔵王食品の工場の跡地がある。現在、地元の方や大学生などがワークショップをして構想を進めているが、自分も含め当社

の社員はその話し合いに入らないようにしている。土地の所有者が自分の考えを言ってしまうとそれが条件・誘導のようになってしまうのではないかと考えたためである。先日上山市から初めて構想案の提示を受けたが、自分が思い描いていたよりもダイナミックでワクワクするような魅力的なものであった。

・会社の運営も一緒で、若手の離職率が高い、入職率が低いので何をしたらよいかと聞かれることがあるが、何かをしてあげようと思うから悪いのではないかと答えている。若い人たちに何をチャレンジさせてあげられるか、どんなワクワクすることをさせてあげられるか、そこに決定権がある人が入らないのが大事だと考えている。色々なことにチャレンジさせ、報告はいらないから困った時は相談しなさいとだけ伝えている。ここ７年で新卒で11 人の社員が入り、１人も辞めていない。県政においても若い人にチャレンジさせてあげることが大切だと考える。

【村山 恵子 氏】

・大山さんの森のようちえんや佐藤恒平さんの不登校支援などとても魅力的な取組みを紹介していただいた。今、子どもの育ちというものが大きな課題になっている。大人が子どもに怪我をさせないように大事に育てることが、結局大人になった時に自分で考え行動することに大きな不安を抱えてしまうことにつながっている。

・先日、あそびあランドに、AI がその場に最適な飲み物を割り出してくれる自動販売機が導入されたのだが、ベテランの販売員の方は自分の経験に照らしてそれに反発するのに対し、新人の方は AI の指示どおりに補充するという話を聞いた。人を疑ったり自分の判断基準を確認したりできるのは、幼少期からの失敗や試行錯誤の経験を重ねることが必要であり、その中で豊かな人間味あふれる子どもたちが育っていくのだと思う。

・人は一生成長し続ける生き物であるのに、まだ子どものうちから、これができないとダメだとか、学校の点数が良い悪いで一喜一憂し、学校が安心できる場所でなく不登校になってしまう子どもたちがたくさんいる。それはたまたま学校が合わなかったというだけでその子がダメなわけではないし、親御さんにもその子の一面だけではなく他のよい面にも気付いてもらえるように支援を行っている。

・学校に行けないというだけで親も子も不幸な思いをしている姿を見ていると、これだけ多様な社会の中で形が変わっていない今の学校教育のあり方はどうなのだろうと思っている。現在鶴岡市出身の工藤雄一先生という方が学校改革を全国展開していらっしゃるが、もっと一人ひとりの多様な個別の学びの機会の確保が必要であると考える。勉強を強いるのではなく自らワクワクしながら学び続けられるような教育環境に変わっていけるように私たちも協力していきたい。

・先日、山形ほど屋内の遊び場が充実している県は他にないという話をいただいた。ただ、豊かな四季のある山形でこそ、外遊びというものが本当に子どもの心と体を成長させてくれるものであると考える。先ほど大山さんからもあったが、東根市のあそびあランドのような立派な施設がないと外遊びができないわけではない。是非山形県らしさということでどんどん外遊びを普及していただきたいと思う。現在、地域の公民館等に出向いて行う移動式の遊び場というものも展開している。

【山蔭 瞬 氏】

・佐藤千草さんや澁谷さんからも行きたい所への交通がつながっていないという話があったが、観光や遊びの面ではつながっていても、生活の面ではなかなかつながっていないという話がある。一つの地域の中だけで考えようとしても、そこを変えると他の地域でうまくいかなくなるところが出てきて難しいという話を山交バスとしている。一つの市町村内だけではなく、山形県全体として大動脈とそこからどう横につながるかというところを見ていくとよいのではないかと考える。

・高齢者のスマホ教室をやっているが、なかなか１回やるだけで覚える人はいない。自由にラインをやりとりできる場があり、わからないことをわからないと言える仲間がいると挑戦することができて、できるようになる。福祉の場で大事なのは「自立支援」であり、やってあげるとできるようにならない。一つ一つ丁寧に繰り返し聴ける人がおり、間違ったことをやってもがんばったねと言ってもらえる環境があると、80～90 代の方でもスマホでやりとりできるようになり、どんどん新しいことを質問してくるようになる。単発でのスマホ教室は様々なところで開催しているが、そこから継続してわからない人が集まれる場が必要だと感じている。

・福島県の限界集落の方が「今ここに住んでいる自分たちは楽しいことをやりたいので居酒屋を開きたい」と話していた、という話を聞いた。それを聞いて、今そこにいる人たちを大事にし、その人たちがやりたいことをサポートすることが大切であると感じた。

・ある障がい者団体のスローガンに「私たちのことを私たち抜きで決めないで」という言葉がある。それはとても大事なことである。自治体の方がよく施策のたたき台を作って持ってきてくれるが、それを作る前に聞いてほしいとお願いをしている。自分たちが何をしてほしいか、どういうものが必要か、話をする場がほしい。

・高齢者が集まって交流できる場を作ってきたが、高齢者の方から「自分たちもできることがある」、「もっと社会参加したい」という話があり、高齢者がもっと経済活動に参加できる方法がないかと考えている。生きがいづくりと言ったときに楽しいことも生きがいであるが、誰かのためになっているということが生きがいを感じる大事な要素になる。高齢者だけで行うよりも、企業の取組みに参加できるとよいと考え、企業を回って仕事の切り出しをお願いしているがなかなか難しいようである。そのように高齢者の方が参画できる場面を一緒に考えていただけると、様々なところで県民の方が元気に活躍できるものと考える。

【角田　愛理 氏】（果樹農家）　※書面による提出

・東京から大江町に移住し、OSIN の会での研修期間を経て、現在はスモモ、ラ・フランス、枝豆、ブロッコリー等を栽培している。

・田舎に憧れて移住したいと思う人の大半の理想は「自然に囲まれた環境で都会よりもゆっくり過ごしたい」というものであるが、実際は、「草刈り、花植え、側溝清掃、飲み会、PTA 行事…」など、都会にいた時の方が自由で縛られていなかったと思うことが多い。それに対して、県内でも都市部の方では草刈りなどの負担はあまりないと聞く。例えば草刈りや側溝清掃などは自治体で対応することはできないものかと考える。

・新規就農者研修制度において、研修生と受入農家の相性不一致による過度なストレスやリ

タイアが多く見受けられる。就農への細かいヴィジョン、目標地点の確認、研修時間の曖昧さ回避など、研修開始前の双方での詳細な話し合いが不足していると感じる。また、研修生は制度が細かく決められているものの、受入農家側は特に教育研修などが現状では実施されていないため、教育者としての基本学習も必要ではないかと思う。これらは個人に任せるのではなく、双方がうまく実施できているか確認するための第三者によるカウンセリングが必要と考える。

・フルーツ大国として名高い山形県ではあるものの、現状さくらんぼ一強というのは否めない。ラ・フランス、スモモ、ぶどう、桃などもブランド力を向上させて PR にもっと力を入れていってほしい。